



坂川美女丸・青木秀樹

KABUKI - ROCKS LOVE MISSILE

「ギタリストのカッコよさ」も、ひとりで両方は追究しきれない

180cmを軽く越える身長で、メイクなしでもじゅうぶんあでやかな、美女丸&秀樹（秀麻呂）。この対談の時には、ふたりともカブキロックスのギタリストだったが、現在はべつべつの道を歩いている。スタイルの違うふたりのツイン・ギターもよかったけど、これからそれぞれが展開していく音とヴィジュアルの世界にも、要注意である。（91年3月16日）

◆事務所が同じということで、ふだんにかと顔を合わせる機会も多いと思うけど、知り合ったのはいつ頃だったの？

橘高：ちゃんとライブを見て、ゆっくりと話ができたのは、去年の夏かな。たまたまオフで大阪の実家に帰った時、カブキロックスのライブがあるっていうのをアニキがスポーツ新聞で見てね（笑）。ふたりで見に行った。

青木：オレは去年の筋少の武道館ライブの時、見に行ったよ。

橘高：あの時の楽屋は人が多すぎて、ろくに話もできなかつたからね。だから、まともに話ができただけは、大阪の時が初めて。

◆実際に会って話をするまでは、お互いにどんな印象を持ってた？

橘高：最初はヒステリック・グラマー（カブキロックスの母体となったバンド）のイメージがすごい強かったのね。でもライブを見に行ったら、それぞれ

がしっかりしたカラーを持ったツイン・ギター・バンドとして成立してたんで、「ああ、そうなのか！」と本質に気づいたという（笑）。坂川さんなんか、手がネックの上をはいまわるような分散コードとかをガンガンやってたりしてたんで「これは帰って練習しなければ！」と思いましたね（笑）。青木さんのほうは、わりと生っぽい、コード・カッティング中心の、ライドにストレッチしそうな感じがして、ウチでたとえると本城みたいな印象がすごく残った。でも新譜を聴くとまた違うんだよね（笑）。

坂川：つかみどころがない、という（笑）。

橘高：オレもいわゆるキッズといっしょで、だまされてるのかもしれない（笑）。

青木：オレは橘高くんのことはアルージュの頃から知ってるんですよ。それで橘高くんが筋少に入ったって聞いた時は「え!? ぜんぜん合わないじゃない?」って思ったのね。

◆ということは、ふーみんがアルージュでどうい

音を出していたか知ってたんだ？

青木：いや、ゴメン、知らなかった（笑）。でもアルージュっていうバンドのカラーは知ってたから、その人が筋少に入ったってことは、これはさうとうスゴいことなんじゃないかと（笑）。で、実際に写真とか見ても、やっぱりひとりだけ浮いてるから「ああ、彼もガンバってるんだな」って思いましたね（笑）。

橘高：申しわけないす（笑）。

◆実際に音を聴いたり、ライブを見てからは、どう思った？

青木：いや、もうたんに「うまいな」と思いましたよ。やっぱり幼い頃からプロでやっている人は違うなと（笑）。たしかにバンドに合っていないんだけど、その合っていないところが合ってるという感じで。

橘高：でもそのイメージは、カブキも同じ（笑）。

青木：ウチはルックスでムリヤリそろえてるけどね（笑）。

橘高：ウチは以前に、ムリヤリ合わせようとして失敗した（笑）。『猫のテブクロ』の裏ジャケットで、みんなで牧師さんの服みたいのを着ただけで、これがムチャクチャ、ダサくて（笑）。ルックスを合わせようとしたのはそれが最初で最後だった。